

# はたらく

2024年9月13日第12号

西南中生徒指導部通信

文責 松浦

参考文献

「大切なことに気づかせる

33の話と90の名言」

西沢泰生

# はたらく

来週、二年生は職場体験学習を行います。各事業所で働くことを楽しみにしていることでしょう。

『働く』ってどんなことなのでしょう？

私自身、子どもの頃は「子ども」でいればよかったのですが、でも大人になると、「何か」になって、自分が生きていくための糧(か)を得なくてはなりません。その手段が『働く』ということなんです。

「こ」で、木下晴弘さんの「涙の数だけ大きくなれる」という本に出てくる、ある小さなスーパーでレジ打ちをする女性のお話を紹介します。

…転職を繰り返していた彼女は、今のレジ打ちの仕事に不満を持っていました。単純な作業で、仕事に何の面白みも感じることができず、不平や不満だらけの毎日でした。

ある日、田舎の母親から「もう帰っておいでよ…。」という電話をもらい、彼女は田舎に帰ることを決心します。引越のために荷作りをしていると、彼女は古い日記を見つけ、ピアニストを目指してがむしゃらに頑張っていた少女時代のことを思い出します。

あの頃に比べて、すっかり逃げ腰になっていた自分…。

「もう少し頑張るよ。」彼女は泣きながら、母親に電話しました。

翌日から彼女の仕事ぶりが変わります。ピアノの要領でレジのキー配置を覚え、レジ打ちのスピードが上がり、余裕が出てきました。そうすると、一人一人のお客様と積極的に話すようになります。

「今日はマグロよりカツオがおすすですよ。」「この野菜、こんな風に料理すると簡単に美味しくできますよ。」「…。」という具合に。

そして、しばらく経ったある日、彼女は思いがけない体験をすることになります。その日のスーパーはお客様で大混雑。彼女は

いつものようにお客様と会話をしながら、レジ打ちに追われていました。そこに店内放送が流れます。

「お客様、恐れ入りますが、空いているレジにお回りください。」

「えっ…？」と黙って周りを見回した彼女は信じられない光景を目にします。五つあるレジのうち、お客様が並んでいるのは自分のレジだけ。他の四つのレジには誰も並んでいないのです。

店長さんがお客様に駆け寄り、「どうぞ、空いているレジにお回りください。」と声をかけると、そのお客様は、「ほっ」といってちよっ

だい。私は「こ」に買い物に来てるんじゃないの。あの人とおしゃべりに来てるの…。」

その言葉を聞いた彼女は、自然と涙がこぼれました。レジ打ちを淡々とこなすだけなら、ただのつまらない仕事かもしれない。つまらないと思われる仕事でも、やりがいを持って取り組むと、ビジネス(仕事)がハピネス(幸せ)に変わっていくのです。

『働く』ということは、自分の「存在証明」だと思います。それは何によってできていくのかということ。

「他者(他人)との関わり」の中で、できていくのです。

「働く意味」とは、そのような他人との関わりの中で、自分の必要性(自己有用感)＝自分を必要とされているんだと思える(こと)を感じる(こと)です。

相手という、人が関わっているからこそ、仕事には大きなやりがいがあるのです。(私自身、教師という仕事にもその大きなやりがいと感じています。)

この女性の仕事はレジ打ちではありません。レジ打ちという仕事を通して、みんなに喜んでもらえること、笑顔になってもらう(こと)を仕事にしていたのです。

自分の仕事が他の人から愛されている…こんな喜びが他にあるのでしょうか。

仕事が自分の夢になるわけではありません。仕事に取り組む姿勢が、どんな仕事でもあなたの夢になっていくのです。そんなことをちよっでも感じ取れる職場体験学習になりますように。